
法則

鞍璽蛙埜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

法則

【Nコード】

N7975H

【作者名】

鞍鹽蛙埜

【あらすじ】

知りもしない魔術系の駄文です。暇ならば暇潰しにはなるかもしれませんが。基本的にダラダラと書いておりますが、もし気に入られる事がございましたら感想等頂ければその方の為に精一杯の早さで続きを書く……………予定です。

ブローグ

だから言っ たんだ。
深入りするなっ て…

自分自身に言い聞かせながら俺はとにかく全速力でバイクの元へ駆けていた。

「よし…」

イグニッションキーを回し、セルフスターターボタンを押せばすぐにエンジンは鼓動をはじめ俺の駿馬になってくれる…

そして、予想通りにエンジンは掛かり官能的なエキゾーストノートを奏でたところで俺は乱暴にクラッチを繋ぎ急発進する。

自分より前に生を受けた25年前のバイクといえど750ccの排気量と70馬力そこそのエンジンを搭載した駿馬は瞬く間に高速道路であつても一発で免許がなくなる、そんなスピードに達していた。

「へっ…いくらぶっ飛んだ奴でも流石にこの速度じゃ…」

乗り物に乗っていないければ追いつけないだろう？

と、眩こうとしてバックミラーをみた俺はとても…

いやあるいは、本能では感じ取っていたのかもしれない。

「やあ、少年。その程度の速度なら、私でもこのように追いつくことが出来るのだよ?」

そう、頭の中に直接響く不思議な声という意思が叩きつけられた…

部屋

今の状況を端的にいうならば…

…つまり…つまり、俺は結論から言えばヘンテコな女に捕まり拘束されている。

何故かは知らん、俺が聞きたい。

というか誰か教えてくれ、そして俺を助けてくれ。

助けてくれたら全財産くれてやる。

ごめん、全財産は嘘だけど…

まあ、衣食住は奪われていないし『わあい、ニート生活最高!』という状況に見えなくもないな。

テレビもあるしな。

普段、テレビはまったく見ないんだがな…こつも暇ではテレビを見るしか娯楽がないのだ。

と、面白くも無いテレビを見ていたら遠くからドアの鍵を開ける音がした。

どうやらこの家——家なのかどうかは知らないが——の主がお帰りになられたようだ。

「やあ、少年、元気にしていたかな？ほら、私は料理が苦手だから、デパートで惣菜を買ってきたよ。」

「そうかよ、その辺に置いておいてくれ。」

そう言ってテレビをまた見る。

「少年、つれないな、たまには有難うとか感謝の言葉はないのかい？」

「…」

「そつ黙るな少年…だんまりか…では私は自室に戻る。用があったらそこの子機で呼んでくれれば良い。」

そう言うと女はでていった。

一体なんなんだアレは、突然拘束しやがって。

ここは謎に携帯電話の電波が入らないし、どういう仕組みかしらんがこの部屋から出ることが出来ない。

部屋から出ることが出来ないというのは施錠されているとかではなく、もっと違う次元で出ることが出来ないのだ。

ドアは開く、ならば普通…ドアから出れば良いのだが、どういうわけかドアを開けても先が無い。

ドアを開けたら壁があるのだ。

正直、意味不明である。

試しにドアを開けっ放しにしていたら、女は壁からにゅっと突き出て入って来た。

勿論、出ていく時は壁にめり込んでいく。

そして当然の事ながら俺にはそんなスキルは無い。

部屋に風呂もトイレもある。

水道も出る。

食事もある。

生活には困らないが監禁されているにはかわりない。

「あーあぁったく、しかも窓を開ければ下には雲が見えるし一体なにがどうなってるんだよ…」

とりあえずご飯食べるか。

…なにげにこのコロッケうまいな。

食事が終わりふと、日付を確認すると…

「うつわ…」

拉致られてから半月もたっている。

終わったな、大学の単位終わった。

つか友人関係も終わったな。

それ以前に搜索願いとか出てねえかな…一人暮らしだし親とも疎遠だから出てねえかもな…
ニュースでもやってねえしな…
とりあえず今日は寝るか。

…

…

…

つか俺、成人してるから少年じゃなくて青年だ、いや、成年か？
とりあえず次に会ったら言ってやろうそっしよう。

部屋の法則

・・・朝か。

「あーあ、また一日無駄に過ごした。」

「というか、無駄に過ごすしか俺に与えられた方法は無いのだが。時刻を確認すると午前7時半ちょうど。」

「とりあえずお腹がすいた。」

「・・・しょうがない、半月もたって何の変化もなくダラダラと監禁されているのにも飽きたしな。」

「そう独りつぶやいて子機を手にとる。」

「つつか、どうやって親機に掛けるんだよこれ。」

「どうにか試行錯誤して親機に掛ける。」

「10秒ほどコールしただろうか、ようやくヘンテコ女が受話器を取った。」

「何だね少年。私は今日は休暇だ。もう少し寝たいのだがね?」

「知るかよ、腹減った。何かくれ。」

「相変わらず、食事以外の用事はないのかな?」

「いいから早くなんか持って来てくれよ。」

「しょうがないね、今何か持っていくから少し待っていておくれよ少年。」

「ちなみにな・・・俺は少年じゃなくって・・・」

「もう青年ですよー、森鷗外の作品じゃなくて年齢的な意味で青年なんですよー。」

「と、言おうとしたところで受話器を置かれた。」

「まあ、しばらくすれば何か持ってアレは部屋に来るだろう。」

「そして、その間俺は少しこの部屋について考えてみた。」

「と、いつでも俺は頭が良いわけでもないし機転が利くわけでもない。つまり部屋から逃げ出す方法も考え付かないだろうし、部屋の仕組

みがわかるわけでもないだろう。

そもそも危害が加えられていない以上逃げる必要も無いわけだが・

・

考えてみる事

その1

携帯電話の電波の受信の度合いを示すマークは圏外を示している。

しかしテレビは映るし、電気もつく。

水道もつかえるとなれば、文化圏から隔離された監禁専用の建物ではなく意図的にジャミングなどで外部との連絡手段を絶っている可能性が高い。

その2

部屋から出る事が出来ないのは、先ずドアの先が壁になっている事。次に窓の外を見る限り、この部屋は地上から届かないような遥か上空にあるということ。

その3

何故か女は壁をすり抜けこの部屋に入ってくるということ。

そして、玄関の鍵の音が聞こえるほど壁は薄いであろうということ。

そして、以上の3つの事を複合して考えると矛盾が発生する。

考察2である視覚情報から得られる状況分析では、この部屋は確実に雲の上にあることになる。

しかし、考察1のテレビが映る、電気や水道が使えると言った事はほぼ不可能であるはず。

そして考察3では壁はとても薄いはずだが、体当たりしてもびくともしない。

考察2と1をあわせて考えると一番可能性が高いのは部屋が空に浮いていて、時給システムが働いているという、とんでもない常態にな

るわけだが

そうなる考察³で女が鍵を開けたときの音が聞こえるという状況がまずおかしい。

空中に存在している部屋にどうやって帰ってくるのか。

「ダメだ、頭悪いから何もわからん。」

「そうか、君は馬鹿なのか。」

ん？ああ、女がいつの間にか部屋に来ていたみたいだ。

「申し訳ないね。本当に料理が苦手なので買い置きのカップ麺でいいかな？いいよね。」

「ああ、良いけど。ちょっと聞きたい事があるんだよ。」

「なんだって？ようやく話し合う気が出たのかい？それは嬉しいね！」

そう、こいつは俺と話し合いたいらしい。

その為に俺は拉致監禁されているというような事を半月前に聞いた覚えがある。

「話し合う前に一つ教える。」

「一つでいいのかい？」

「・・・そうだ一つじゃない。」

「いや、色々教える。」

「言う事がころころ変わるんだね。少年は。」

「まあいい。まず一つ目。何故俺をここに連れてきた。」

そう、肝心な所を忘れていた。

何故俺は拉致られたのか。

「それは君がとても貴重な存在だからだよ？」

「なぜ、ただ俺はお前が不良に絡まれていたから助けてやっただけだろう。」

「不良？私が不良に絡まれていたのかい？」

「は？絡まれていただろばっちり完璧に。まあ不良よりお前の方がよっぽど危険人物だったみたいだけだな。」

「君には、あれが不良に見えたのかい？違うよ、全然違うんだよ。」
「はあ？」

「ちよつとややこしいけどね。うん、簡単に言つと彼らは物理現象に近い法則で発生した現象だね。」

「・・・はあ？」

ナニヲ イツテ イルノデスカ？この女は。

「とりあえずいいや、で、助けると何で俺が拉致被害者になるんだよ。」

「それは君の能力にととてもとても興味があつたからだよ。」

「能力？お前、やつぱり頭おかしいだろ？」

「君は本当に失礼だね。私の観測対象を破壊してくれたと思ったら、一目散で逃げ出すし、こうやって生活に困らない程度の環境を提供している私に対して・・・」

「うるせーよ、『お前、何をする、殺してくれる』とか良いながら短剣出されたら誰でも逃げるだろうがよ。」

そう、この女は折角不良から助けてやったのにいきなり銃刀法違反だろという、もうばつちり違反ですよねっていう之でもかというくらいキラキラ光る刃物を手にいきなり襲い掛かってきたのだ。

「でも君は怪我をしなかったじゃないか。」

「たまたまだろうが！」

「いいや、たまたまじゃないね。あの短剣は普通の短剣とは訳がちがうんだ。あれはね・・・」

「ああ・・・もういいや、とりあえず、アンタからみて俺はなんかしら魅力的なところがあつたから拉致られた訳ね。」

「なんだい、なにも私は答えていないのに自己完結したのかい？まあ、わかってもらえたなら良いのだけどね。」

何もわからんがな！H A H H A H A！

「ちなみに、私はアンタではないよ、素敵な名前があるのだ。」

「おーおーそうかい、俺も少年じゃないんだよな。青年なんですヨ？」

「そうゆう意味で言ったのではないよ、固有名詞があると、そういつているんだけどな。」

「へえ」

興味はないが尋ねてみた。

「なんつつんだよ。」

「琴音という。どうだい？素敵だろう。魔法名はもっと素敵だよ？」

「・・・魔法名だと？」

「そうだよ、私は魔術師だからね、魔法名もあるのさ。」

「魔術師？」

「あれ？魔術師、知らないかい？魔術を扱う人間の事だよ？」

「しってますけど、馬鹿にしていますか？」

そして笑いながら女は言った。

「いや、でも本当に驚いたよ、あれほどの秘術を実現する君には私の魔術は効かないと思ったのだけれど一撃だったね？」

それに君はこの結界から出る事も出来ないようだ。」

・・・・・・は？

ああ、もう駄目だよ。

うん。

もうだめ。

だって何？魔術？馬鹿でしょこいつ、俺以上に馬鹿だよこいつ。

あーあー話すだけ無駄だ。

俺の人生おわったね。

こんなわけの分からないやつに拉致されたのが運の尽き。

この部屋って結界が張ってあるんだってさ！（笑）

結果だってよ！結果！まじ超常現象もいいところだよな！！！！

そりゃ外に出られないわけだね

H
A
H
A
H
A
H
A
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!

「そうかそうか、お前が俺の事をとつても馬鹿にしてるのもわかつたし、その壁すり抜けスキルとかもきつと魔術なんだろうな。」

うんうん、そうなんだろ？な、だから俺はそろそろカップ麺を食べるよ、どうもありがとう。」

早口に巻きたてると

「ようやく感謝の言葉を学んだか、成長したな青年。」

と、言っ
て女は

「じゃあ私はこれから寝るからね。何かあったら子機から連絡をくれるといいよ。」

それと、この部屋は一定の魔術法則によつて色々と規制されているよ。

例えば一定の電波や音、光や風なども中から外に出ることはないし、入る事も無い。

つまり、君は私にあのときの秘術を解き教えるかこの魔術結界の根底に流れる一定の法則を割り込みして改竄するか、消去する以外の

方法では二度とこの部屋からは出ることが出来ないからね。それを良く考えて、残りの半月を過ごすと良いよ。」

そう告げると、壁スルースキルを使って部屋から出て行った。

え？ていつかなに？

俺あと半月すると殺されたりするの？聞かされてないんだけど・・・

・・・
というかそれ以前に、なに秘術って・・・

とりあえず、アレと話して収穫があつたとすれば・・・この部屋はある魔術による法則に支配されていて、そのせいで色々俺は不便している。

ふーん・・・あほか

取り合えずだ。

俺も二度寝しようしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7975h/>

法則

2010年10月11日22時09分発行